1

TALK

対談

海外を見ることで気づく日本の良さ

ラーシュ・ヴァリエ
（駐日スウェーデン大使）

×

小宮山 宏
（三菱総合研究所理事長）

2011年9月に就任した駐日スウェーデン大使のラーシュ・ヴァリエ氏は、日本研究者でもあり、俳人という顔ももつ。日本で過ごした時間は合わせて20年近くにもなるという。そのヴァリエ氏から見た日本はどのように映るのか。日本の良さや、その良さを育んだ源について語っていただいた。

小宮山　ヴァリエさんは日本の歴史、文化、宗教に深い関心をもたれているとうかがっています。初めて日本にいらしたのはいつのことで、そのときはどのような印象をもたれましたか。

ヴァリエ　1972年の正月でした。シベリア鉄道に乗って、ストックホルムから横浜まで13日かけて行きました。当時のソビエト連邦領内はとても貧しく、自由も感じられないところでした。そういう国から日本に着いた途端、開放的な国へ来たと感じられたのです。日本の最初の印象は、その開放感と明るさですね。カラフルな看板がたくさんあったことにもほっとしました。

小宮山　最初に日本に興味をもったきっかけはどこにあったのでしょうか。

ヴァリエ　1960年代の終わりごろですが、当時私はストックホルムの高校に通っていました。静けさを求めて、ストックホルム市内にある東アジア博物館をよく訪れていました。そこには東洋の書画をはじめ魅力的な作品が多数展示されていたのですが、なかでも私は日本の「書」に興味を引かれたのです。

大学に進学してからしばらくは中国語と中国文化を勉強していました。学んでいくうちにだんだんと興味が日本のほうに移り、日本の文化、日本の歴史を研究してみたくなったのです。とくに禅宗に興味をもちました。禅に関するさまざまな本を読みましたが、そのうち、日本に禅が伝えられた13世紀から現代まで、また禅が入ってくる以前の日本についても勉強を重ねることになります。古墳時代の社会構造から、古くは縄文時代にまでさかのぼりました。その結果、古墳時代から大化の改新までの発展が、日本の国の根本を創り上げたのではないかという考えをもつに至りました。

――日本とスウェーデンについて

小宮山　文化人類学者の故・梅棹忠夫さ

ガムラ・スタン（旧市街）の入り口に浮かぶ
ヘランズホルメン島にある国会議事堂。
独特な半円形の建物が美しい（1）
シェップスホルメン島にある東アジア博物館。
敷地内には日本式の茶室（2）や
中国石器時代に発掘された土器などが展示されている（3）
写真提供：
Ola Ericson/imagebank.sweden.se（1）
Bo Gabrielsson（2）
Destination-stockholm.com（3）

んは、西欧と日本という離れたところで際立った文化が発展したのは、それぞれの地域で一度も文明が根こそぎ断ち切られていないからだと言っています。スウェーデンも長期にわたって他国に占領された経験はありませんね。

ヴァリエ　ありません。1年ほどデンマークが入ってきたことはありましたが、根こそぎという点では、ないと言っていいと思います。

ラーシュ・ヴァリエ
駐日スウェーデン大使（2011年に就任）。1947年スウェーデン、ストックホルム生まれ。1982年ストックホルム大学日本研究博士号取得（論文題目「古代日本国家の形成過程の社会・経済的状況」）。1971年ウプサラ大学中国学専攻修士号取得。著書に『日本の組織文化』（カールソンス出版社）、『スウェーデンから見た日本の素顔』（メイナード出版社）、『アウト』桐野夏生の小説訳書（ブラーボエッケル出版社）など、数多くのスウェーデン語、英語、日本語の著書・訳書がある。

小宮山　アジアの大平原や砂漠地帯に、チンギス・ハーンやオスマン・トルコなど猛々しい征服者が次々出現しましたが、彼らの勢いも西欧の中枢までは届いていません。ドイツの東、フランスの南で撃退されていますね。日本も、ご存知のように元寇の襲来はありましたが、本土の制圧はされていません。

禅もそうですが、日本にも西欧にもほかの地域からいろいろなものが入ってきました。どちらも文明が連続的な発展を遂げたので、外から入ってきたものを自分の文化として消化しながら洗練させていったのでしょう。

さらに言えば、国内においても平和な時代が長かったことも影響していると思います。日本は、平安時代と江戸時代を合わせると約650年、それぞれ一時期を除けば国内でも大きな戦争がありませんでした。スウェーデンはどうでしたか？

ヴァリエ　スウェーデンも1814年から戦争はしていません。

小宮山　スウェーデンは他国と接していますが、日本は島国ですからね。そういう意味での特殊性は当然あると思います。よく言われるシャイ、恥ずかしがりという性格も、日本人は際立っています。ただ、それに関しては、スウェーデンも欧州のなかではその傾向が強いんでしょうね。静かできまじめで、交渉が苦手。アングロサクソンやラテンの人々に比べると、やはりスウェーデン人は日本人に似ているなと感じます。

ヴァリエ　おっしゃるように、スウェーデン人と日本人には似ているところが多いと思います。スウェーデン人も日本人も、静けさが好きですね。市場のように大勢の人がいて賑やかなところは、ちょっと苦手だと感じるスウェーデン人が多いでしょう。静かにしていることを好みますから、外国のお店で値下げ交渉をするようなことも苦手です。これは日本人も同じですね。もちろん、スウェーデン人が日本に行くと人の多さに驚くことはあるのですが、一般的には、日本社会はスウェーデンと同様、静けさを大切にしていると思います。また、自分の意見をはっきり表さなくても相手に通じるのではないかという心理があります。以心伝心というのでしょうか、そこも似ていますね。

小宮山宏（こみやま・ひろし）
三菱総合研究所理事長。1944年生まれ。1967年東京大学工学部化学工学科卒業、1972年同大学大学院工学系研究科博士課程修了。2005年東京大学総長、2009年総長顧問。専門は化学システム工学、地球環境工学、知識の構造化など。著書に『「課題先進国」日本』（中央公論新社）、『低炭素社会』（幻冬舎）、『日本「再創造」』（東洋経済新報社）、『Beyond the Limits to Growth』（Springer）など多数。

小宮山　日本人とスウェーデン人の共通点というと、スウェーデン人は人が集まると歌い出すんですよね。飲むとみんなで歌うんです。これも日本と一緒ですね。

ヴァリエ　そうですね。とくに強いお酒を飲むときは、歌が必須です。

小宮山　お酒を飲んで歌い出すといっても、フランス人やイタリア人とはやっぱり違う。ああいう賑やかなカルチャーはあまりない。私も実際にスウェーデンに行って驚きました。

――「道」に見るこだわりとプロ意識

ヴァリエ　日本文化を特色づけている大きなものに「道」があります。これは日本独特で、非常におもしろいですね。日本では、茶道、華道などの芸事、柔道や剣道だけでなく、仕事をしている人、ものをつくっている人も、彼らなりの「道」をもっていると思います。

小宮山　「道」も、平和な時代に育まれたものです。戦がない期間が長かったので、興味をもった物事にとことんこだわって深めていくことができた。平和だからこそ、徹底的にこだわれたんですよ。

　おっしゃるとおり、ものづくりにもそういったこだわりが浸透していると思います。とくに江戸時代の平和は大きいですね。同じ時代、欧州では産業革命が起こりました。これが欧州を決定的に先進国としたわけですが、その間日本でも、ものづくりは進んでいました。今の佐賀県、当時の鍋島藩は、1853年に開国交渉に来たロシア軍艦上で蒸気機関車の模型を見てたった2年で同様の模型をつくってしまったほどですから。それだけ、江戸時代の長い期間でものづくりの技術を蓄積していたということです。

ヴァリエ　プロ意識とこだわりというのは、よくわかります。私は、たとえば改札口の駅員にも「道」を感じます。昔の改札口では、駅員が常に「チキチキチキチキ」と音を立てながら切符を切っていました。自動改札になって今ではこういう音もなくなってしまいましたが、たぶん彼らは誇りをもってあの音を出していたと思うんです。もちろん音を出すだけでなく、いかにうまく切符を切るかということもですね。それは、「改札道」とさえ言えるものではないかと思います。徹底的にこだわるという考え方は、スウェーデン人とは異なる部分で、やはり日本の1つの良さを表しています。

――道徳心と勤労をもたらすもの

小宮山　仕事に誇りをもつようになった、徹底的にこだわるという日本の良さの源はどこにあるとお考えですか。

ヴァリエ　たとえば東日本大震災のときに、人々は大災害に対してとてもうまく対処しました。お店の商品が少なくても略奪は起こらず、みんながきちんと並んでいました。私にはそれが非常に印象的でした。何か問題があれば「自分はどのように解決したらいいのか」ではなく、「われわれはどのように解決したらいいのか」となる。日本社会は個人主義ではなくグループ社会だと思います。難しい問題が出てくるとグループで解決するというのが、日本の強さだと思います。

　その根本にあるのが「道徳」なのでしょう。日本人の一番良いところはと尋ねられると、道徳であると私は答えます。ここにも「道」が入っています。たとえば、ほかの人が見ていなくてもごみを拾う。だれに命じられなくても街をきれいにする。そういう道徳が強く浸透しているのですね。西洋では、ほかの人が見ていなければごみを拾いません（笑）。

小宮山　日本には、お天道様が見ているという発想があります。だれも見ていないのではなく、お天道様が見ているんです。日本は一神教ではないので、自然のどこにも神が宿っているという考え方で、お天道様はその象徴です。欧州では神様が見ているからという考え方はないですか。

ヴァリエ　そういう考え方はあまりないですね。スウェーデンでは、神様が見ているからというより、いい人になりたい、いい人でありたいから拾うという人はいました。ただ、これは昔の話です。現代では、

ヴァリエ氏の著書・訳書の一部（左から）『日本の俳句–世界で最も短い詩』（カールソンス出版社）、『コオロギを思い出す』夏目漱石の俳句訳書（竹林出版社）、俳句集『冬の月』（韓国で出版）、「権力の表現」としての日本版画『De hundra skratten（百選百笑）』（※スウェーデンで出版）、『日本–文化と歴史』（アスクホルム社）

そういう考え方は少なくなってしまったかもしれません。

小宮山　日本では昔から、地道に働くということが当たり前でした。江戸時代も士農工商といって、実情はともかく、農民は身分階級制度の2番目に高いところに位置づけられていました。

欧州は貴族が中心となっていた社会ですから、働くということはあまり重要視されていなかったのではないですか。ピューリタニズムが生まれて初めて、働くことはいいことだという価値観が出てきたのでしょう。

ヴァリエ　そうだと思います。スウェーデン社会も貴族が中心でした。ただし、スウェーデンの貴族は農民のことを尊重していました。15世紀に誕生した国会にも、当初から農民の代表が参加していました。スウェーデンの貴族に関して言えば、ただ遊んでいたわけではなく、社会のなかで自分たちの位置づけをきちんと理解していたのではないでしょうか。産業革命も貴族が主導しました。

小宮山　そうですね。日本は大量生産という産業革命を経験しませんでしたが、徹底的にこだわるものづくりの伝統があったため、明治のわずかな期間で西欧に追いつきました。ただし、日本では民主主義の思想が発展しませんでした。その点、スウェーデンには民主主義の考え方が根づいていて、だからこそ国会も早い時期に誕生したのでしょう。

ヴァリエ　スウェーデンは伝統的に社会民主主義の思想が根底にあります。国会だけでなく、大学（ウプサラ大学）も15世紀に設立されています。貴族がいて階級社会ではあったのですが、民主主義が必要だということは貴族もわかっていたのだと思います。

小宮山　民主主義はスウェーデンのほうが圧倒的に早いですね。ここが日本の弱点なのではないでしょうか。明治に入って産業の面では西欧に追いつきましたが、民主主義にはまったく力を入れていませんでした。上が決めてくれたら動く、でも自分たちで決めて動くということはなかなかできないんです。

一方で、日本人の特徴を表す言葉に「世間様」というものがあります。周りの人たちを気にする社会性が築かれていきました。

ヴァリエ　それはスウェーデンもよく似ています。かつては貴族が力をもっていたのですが、何をやるにも隣の人の意見を聞かなければいけないという考え方が浸透しています。貴族が農業に関して何かプロジェクトを実行するときでも、勝手に決めて勝手に始めるのではなく、必要に応じて農民の意見を聞いていました。すでに中世からそういう文化があったんです。力で社会を変える革命も、スウェーデンでは起こりませんでした。

小宮山　日本も市民革命は経験していません。その点でも、日本人とスウェーデン人は似ているところがあるのでしょう。

—— 変わりゆく日本のイメージ

小宮山　外国から見て、戦後の日本は工業先進国として経済成長を成し遂げてきたというイメージが強かったと思いますが、その後、イメージはどのように変わりましたか。

ヴァリエ　外国から見た日本のイメージは常に変化しているのですが、誤解している部分も多くあります。1960年代は、まるで現在の中国のように、日本中どこへ行っても空気が悪い、公害がひどいというイメージでした。80年代には企業の組織力が強いというイメージ。それからバブルが崩壊して、日本はもうダメだと。それは合っている部分もありますが、多くは間違っているのではないでしょうか。

現在でも、多くの国が、日本には良いイメージをもっていると思います。ただし、やはり少し複雑になっていますね。日本と中国の関係がどうなるかと心配している人が増えています。これに関しては、何とかしてほしい、解決してほしいという見方だと思います。日本の問題というより、東アジア地域の問題として見るようになっているのでしょう。

小宮山　国境は、政治的・軍事的なものを除いては、すでに物理的な意味が薄れています。以前は国境と言うと、いろいろな意味でバリアの役割を果たした。人の行き来にも、ものやお金の行き来にも、もちろん情報にとってもです。つまり、かつては国境には明確な意味があったんです。ところが今は、うまくいっているかどうかは別として、欧州はEUという形で

国境をなくしていますよね。

日本の国境問題も、目先の利害だけでなく、未来を見て賢く解決してほしいというのが私の率直な願いです。

―― 日本人はもっと外に出よ

小宮山　未来を見据え、これからの日本はどのようにしていけばいいでしょう。

ヴァリエ　正しい日本の姿を伝え、世界から理解されるために、まずはみなさん英語はもう少しうまくなったほうがいいと思います（笑）。

小宮山　同感です。日本人の英語力はまだまだ低すぎますね。

ヴァリエ　そう思います。スウェーデンのテレビを見ると、外国人のインタビューなどは外国語をそのまま放送しています。字幕は付いていますが、いずれにしてもいつも外国語を聞いていますね。子供時代からその環境に慣れています。日本では、字幕が付いている番組もありますが、原則的には吹き替えが多い。それはやめたほうがいいですね。

それから、日本人はもっと外国へ行くべきです。別の国には何があるのかを自分の目で見て、その国の人たちと交流し、その体験をもとに日本で議論することです。もちろん、外国人と交流するためには英語力が必要です。私は日本大使になる前は韓国大使でしたが、韓国での強い印象は、彼らは英語を話したい、外国で勉強したい、そして外国の良さをもって帰りたいという気持ちがとても強いことです。外国を積極的に見ようとしています。

昔はむしろ逆で、明治維新のころは日本のほうがこういうスピリットをもっていたんだと思います。そのころの韓国は外国を見ようとはしていませんでした。それが変わってきたんです。

小宮山　これについてもまったく同感です。日本は、極端に言えばアメリカの背中を見続けてきた。戦後の荒廃から立ち上がり、先進国への仲間入りを果たすまでならともかく、これからの時代は、さまざまな世界を見ることです。

ヴァリエ　日本人は自分の国の良さ、つまり深い文化や深い歴史、さまざまなことにこだわりをもつ国という伝統に誇りをもって、オープン・マインドで外国を見つ

める姿勢が必要だと思います。

外国を見ることで、知らなかったものを新たに発見できるだけでなく、自分たちの良さや強さも再発見できる。それが日本という国の自信にもつながっていきます。

小宮山　日本人は自分たちのことを意外と知らないというのは、まさにそのとおりだと思います。なぜかというと、これまで比較したことがないからです。外国に行って異なるものを見知ることで、初めて自分のことを知り、立ち位置がわかります。日本のなかだけにいた人には、日本というものはわかりません。

もちろん日本人のなかにも個性の差はありますが、それよりも外国人との差のほうがはるかに大きい。それを知ることが自分たちを知ることであり、歴史などの勉強はそれからでもいいんですよ。

とにかく外へ出て外国人と交流するためには、英語を勉強する必要がある。日本語もまともに話せない子供のころから英語を教えるのは良くないという議論がありますが、そんなことはない。小さいころから日本語と英語を両方学んでも、子供はきちんと適応していくことを、先程ヴァリエさんもお話しくださったが、すでに他国の事例が証明しています。テレビには、すぐにでも外国語放送を実践してほしいです。

自分の目で外国を見る。異なる文化を自分の目で見て体験し、アクションを起こしていく。こうした経験を積むことを未来を拓く日本人に期待したいと思います。